

おおいた

AQUA NEWS

アクア・ニュース

NO.43

2016.7



表紙写真：漁業調査船「豊洋」による卵稚仔調査

目次

◎水産研究部長あいさつ	2
◎平成27年度水産研究部スタッフ及び担当業務	3
◎各担当、チームのトピックス	
・水温が変わると獲れる魚も変わる(栽培資源チーム)	4
・養殖ブリでディナーを♥(養殖環境チーム)	6
・「ヒジキ資源増殖のための手引き」を作成しました(浅海チーム)	8
・天然アユを増やすための産卵場造成時期とは(内水面チーム)	10
◎浜からのたより	
・豊前海で生きる！(北部振興局)	11
・潜水漁業者による地元水産物の販売(中部振興局)	12
◎人権コーナー	13
◎転入者紹介	14

水産研究部長あいさつ

農林水産研究指導センター水産研究部長 横松 芳治



この4月の熊本地震で被災された方々に心からお見舞い申し上げます。一日も早い復興を心からお祈り申し上げます。

皆様方には日頃から水産研究部の調査研究業務につきまして、

特段のご協力とご支援を頂いておりますことに対して厚く御礼申し上げます。

まずは、うれしいお知らせです。今年3月に開催された日本魚病学会で養殖環境チームの福田専門研究員が、学会賞を受賞しました。養殖ブリやヒラメを中心とした海産魚の疾病についての研究と対策指導に30年以上従事し海産魚類の疾病防除法に関する多くの研究業績をあげたことなどが認められました。この賞は、全国の大学や国・県の魚病研究者のなかから毎年一人が選ばれ、魚病研究の最高賞であり、本県の魚類養殖現場と一体となった魚病研究が全国的に評価されました。今後とも大分県の魚病対策に貢献し、若い研究者の一層の励みになることを期待するものです。

さて、人口減少社会の到来、グローバル化の進展、ライフスタイルの変化などこれまでにない社会の変化、大きな転換期を迎えるなかで、昨年12月に大分県の新たな農林水産業の長期計画「おおいた農林水産業活力創出プラン2015」が公表されました。この計画では、変化に対応し挑戦と努力が報われる農林水産業の実現と安心して暮らしていける魅力ある農山漁村づくりを基本目標として、平成35年農林水産業による創出額(産出額に加工等の付加価値額などを足した金額)2,250億円を目標としています。水産業では435億円を目標としています。

今年度は「おおいた農林水産業活力創出プラン2015」の実行元年です。水産研究部では、挑戦と努力が報われる水産業の実現のため、ニーズ・スピー

ド・普及を行動指針として、戦略魚種(養殖ブリ類・ヒラメ・クロマグロ・カキ類、関あじ・さば、たチウオ、ハモ)を中心に技術開発に取り組んでいきます。

まず、魚類養殖業の構造改革では、ブリ養殖と複合養殖魚種として有望なヒラマサの人工種苗生産について、コスト削減や稚魚期の魚病対策を確実にし、漁業公社への技術移転を促進します。さらに、EU向けの輸出品目として完全養殖ブリの種苗生産技術の開発研究に着手します。また、カンパチ・ドジョウなど新たなかぼすブランド養殖魚の創生により、かぼす魚の生産拡大を図るとともに、マーケットのニーズに応じた養殖魚づくりを目指します。

漁船漁業では、引き続きタチウオやアジ・サバの資源回復のための資源調査を行い、資源量の推定や生態について一層の精度向上を図るとともに、今年度から戦略魚種ハモの資源生態調査に取り組むことにしており、資源管理に取り組む漁業者の期待に添えられるものと考えております。

また、長期化・広域化するカレニア・コクロ赤潮の被害防止対策研究や貝毒のモニタリング、魚病対策、カワウ対策など確実にし、漁業被害の防止・軽減を図ります。

これらの研究の成果を普及指導員と連携して漁業現場に素早く普及することが、本県の水産業の振興を支え、構造改革・マーケットインのものづくりを加速させ、変化に対応した強い水産業、魅力ある漁村づくりの実現の一助になるものと考えています。

今後とも引き続きご支援、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。



日本一のおんせん県おおいた  味力も満載

平成28年度水産研究部のスタッフ及び担当業務

水産研究部長 横松 芳治		次長 鹿嶋 豊郎		主な担当業務
部 所	職 名	氏 名		
管理担当 豊洋	課長補佐(総括)	清家 和重		管理担当の総括
	副主幹	増永 由美		管理・庶務会計
	船長	清川 弘一		調査船の運航・管理
	機関長	高木 幹也		〃
	主任船舶技師	児玉 直樹		〃
	技師	藤澤 芳宏		〃
	技師	松岡 三代		〃
	技師	長田 彩		〃
企画指導担当	主幹研究員(総括)	真田 康広		企画指導担当の総括、調査研究の企画及び連絡調整、調査研究成果のとりまとめ及び広報・外部評価に関すること
	主幹研究員	堤 憲太郎		水産研究部の予算編成、漁業調査船に係わる調整、その他企画調整
栽培資源チーム	主幹研究員(TL)	徳丸 泰久		栽培資源チームの総括、藻場造成に関わる研究
	主任研究員	林 亨次		ヒラメ育苗、その他の種苗生産技術開発
	研究員	亀田 崇史		アフリ種苗生産、餌料培養の技術開発
	研究員	山本 桂伊		ヒラメ種苗生産技術開発、放流技術開発
	主幹研究員	内海 訓弘		水産資源の調査研究、資源管理型漁業の調査研究、タチウオ資源回復
	研究員	中尾 拓貴		水産資源の調査研究、水産基盤整備事業調査、アジ・サハ資源調査、TAE
	研究員	安部 洋平		水産資源の調査研究、漁海況予報、TAC、新漁法開発、魚礁原単位調査
養殖環境チーム	専門研究員(TL)	福田 穰		養殖環境チームの総括、魚介類疾病診断、ワクチン使用指導と実用化研究
	主任研究員	木本 圭輔		養殖魚類病害防除技術・健康診断技術開発
	研究員	甲斐 桑梓		養殖魚介類の防疫対策、生産物の安全性確保指導
	主幹研究員	木藪 仁和		魚介類養殖技術の開発、飼料の安全性評価と適正使用指導
	研究員	川上 恵		養殖生産物の品質向上技術、流通改善技術開発と利用加工指導
	主任研究員	宮村 和良		赤潮・貝毒の監視と対策指導、予知技術開発
研究員	大竹 周作		養殖漁場環境調査と適正管理推進指導、環境保全指導	
浅海・内水面グループ 管理担当	グループ長	末吉 隆		浅海・内水面グループの総括
	主幹	植木 勝信		庶務・会計
	主査	甲斐 弘也		庶務・会計
浅海チーム	主幹研究員(TL)	伊藤 龍星		浅海チームの研究総括、資源評価調査委託事業(資源関連調査)、バカガイの資源・生態の研究、世界農業遺産関連事業
	主幹研究員	岩野 英樹		ヒシキ等藻類の増殖技術の研究及び指導、赤潮及び貝毒の調査、被害防止対策研究、アサリ等の漁場環境調査研究
	主幹研究員	金澤 健		豊前海アサリ資源量調査、タイキ種苗生産・増養殖技術開発、二枚貝の養殖技術等指導、アサリ稚貝保護対策、アサリ増養殖技術の開発
	研究員	山田 英俊		海洋観測、浅海漁場環境調査、ヒシキ等藻類の種苗生産技術及び養殖研究、ノリ養殖病害対策研究、ノリ養殖指導
	研究員	酒井 真梨子		養殖用アサリ種苗生産、種苗生産用生物餌料の培養技術の研究
	研究員	菅沼 倫美		海洋観測、浅海漁場環境調査、ヒシキ等藻類の種苗生産技術及び養殖研究、ノリ養殖病害対策研究、ノリ養殖指導
	研究員	山本 宗一郎		魚介類の放流技術に関する調査研究、タチウオ資源回復、マコレイの資源増大支援事業、魚礁効果調査
	研究員	宇都宮 のぞみ		マコの増殖量産技術の研究および指導、バカガイの資源生態研究
内水面チーム	主幹研究員(TL)	樋下 雄一		内水面チームの総括、カワウ・外来魚対策、アユ養殖技術開発、漁場環境保全
	主幹研究員	畔地 和久		アマコ・ヤマメ増養殖技術普及、魚類防疫対策、アユ増養殖技術開発、陸封アユの有効利用に関する調査研究、希少水生生物保存対策
	主任研究員	徳光 俊二		ドジョウ・スッポン飼料開発、スッポン・アマコ・ヤマメの贈養殖技術開発の普及、内水面漁業・養殖技術の普及、ウナギ資源

職員数40名(内訳 研究職27名 海事職6名 行政職員等7名)

水温が変わると獲れる魚も変わる??

栽培資源チーム 研究員 安部 洋平

大分県南部に広がる豊後水道は、瀬戸内海から流出する海水と、黒潮から運ばれた暖かい海水が流入する海域で、豊かな漁場を形成しています。そんな豊後水道では様々な種類の魚介類が獲れますが、ここ最近、これまで見られなかった魚が獲れ始めています。写真1をご覧ください。



写真1 カタボシイワシ

私は調査で市場に行ったとき、しばしば漁師さんからこの魚の名前を聞かれます。調べてみると、この魚は名前を「カタボシイワシ」といい、主に鹿児島県で漁獲されており、暖かい海域を好む魚だということがわかりました。カタボシイワシに限らず、ヒョウモンダコなどの南方系の生物も最近をよく見られるようです。暖かい海の生物が獲れるということは、豊後水道の水温は昔に比べて高くなったということなのでしょう。そこで、海水温の変化について見てみることにしました。

大分県農林水産研究指導センター水産研究部では、月に1回、調査船「豊洋」により豊後水道の海洋観測調査を実施しています。この調査は50年以上も前から続いており、現在も継続して行われています。ここでは1967～2014年(計48年間)の調査結果を用いて、表層水温の長期変動について解析しました。解析結果を見ると、表層水温は数年おきに上下動を繰り返しながら上昇傾向にあることがわかります(図1)。この上昇率を見積もると、1年間で約0.017°C上昇しており、延べ48年間で約0.8°C上昇している計算になります。また、1992年以降、水温が急激に上昇しているのがわかります。これは一般にレジームシフトと呼ばれる現象で、数十年単位で気温や水温が急激に変化することをいいます。なぜこのような変化が起こるのかははっきりとは解明されていませんが、この変化は漁業に大きな影響を及ぼしました。例としてマイワシの漁獲量の減少が挙げられます。マイワシは寒冷な環境を好む魚です。レジームシフト以前の1980年代では全国的にマイワシ

シが大量に漁獲されていましたが、水温が高くなったレジームシフト後はめっきり漁獲されなくなりました。大分県も同様で、図2に示したように1994年に急激にマイワシ漁獲量が減少しているのがわかるかと思えます。

一方で、注目してほしいのが、2015年の漁獲量です。1994年以降、3,000トン以下の低水準で推移したのが、2015年は約9,000トンまで急増しました。この変化を考察するため、水温の「偏差」を見てみることにしました。ここでいう「偏差」とは、各年の水温が調査期間の平均からどの程度離れているかを表します。偏差で見ると、レジームシフトが起きたと考えられる1992年から2010年までの水温偏差は正の値で推移していました(図3)。つまりこの期間は平年に比べ水温が「高い」時期であったといえます。しかし2011年以降、水温偏差は負の値へとシフトしているので、2011年から2014年までは低水温で推移しているということになります。

様々な理由が考えられると思いますが、2015年にマイワシが豊漁になった要因の一つとして、マイワシが寒冷な環境を好む魚であることから、近年の低水温がマイワシの生残や産卵に良い影響を及ぼしたのではないかと推測できます。これまで述べたように、豊後水道では長期的には水温が上昇しているものの、近年は短期的に低下傾向であることが明らかになりました。また、このような水温変動がマイワシの漁獲にも影響している可能性が示唆されました。今後、海洋環境の変化による漁獲物の動向を把握するためにも、現行の海洋モニタリング調査を継続し、あらゆる事象に注視して海の状況を記録していくことが大事なことだと考えます。

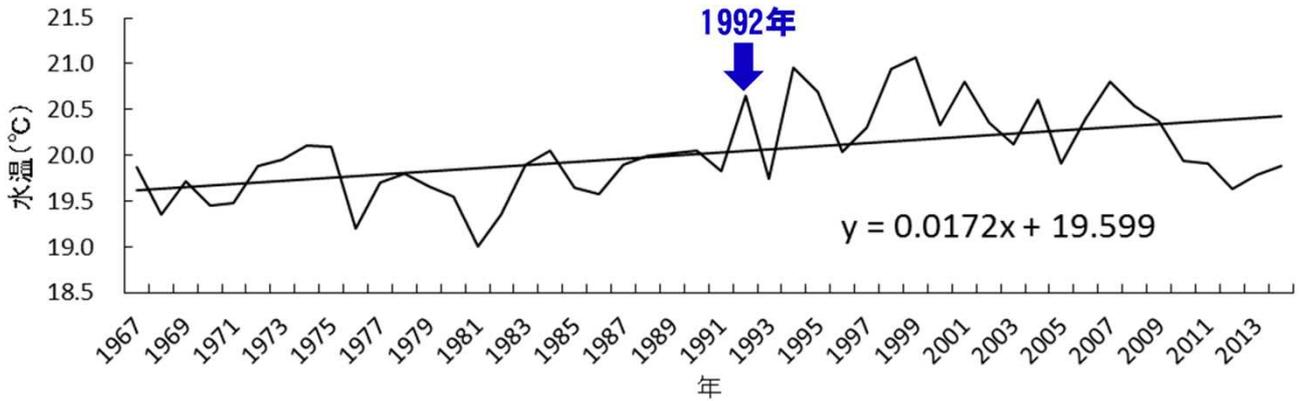


図1 表層水温の長期変動

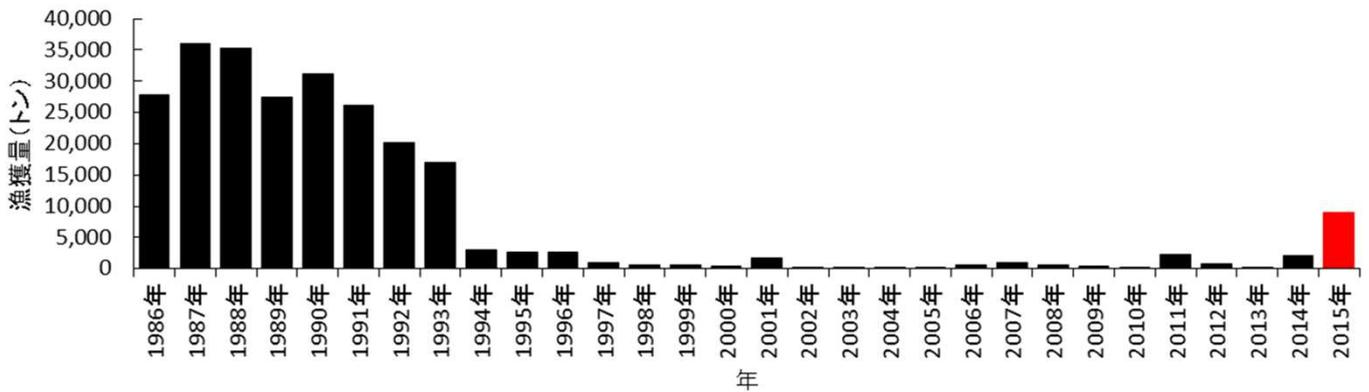


図2 大分県における年別マイワシ漁獲量(鶴見、米水津、蒲江のまき網による漁獲量)

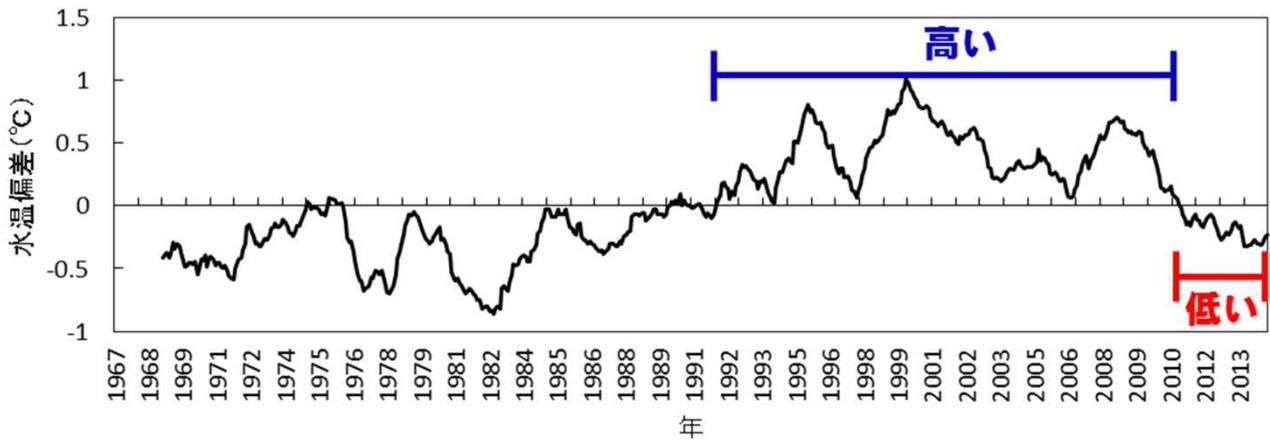


図3 表層水温における月別偏差の25か月移動平均

養殖ブリでディナーを♡

養殖環境チーム 研究員 川上 恵

大分県の養殖ブリ生産量は鹿児島県について全国2位で本県は日本を代表する産地となっています。なかでも佐伯市は県内の養殖ブリ生産量の80%を占めます。当市では、ブリ産地の地の利を活かした海鮮丼に人気が高まっていますが、さらに消費を拡大するには、広く多くの方に提供できる商品やレシピを作ることが課題です。そこで、佐伯市が事務局となり県水産研究部、養殖業者、県漁協、加工業者、学校栄養士、調理士等が集まり「養殖ブリ加工品開発プロジェクトチーム」ができました。

会議では、どうすれば養殖ブリの消費が増えるのか熱い議論が繰り返されました。そんな中、水産研究部の提案がきっかけで商品化されたのが「ブリの燻製」です。しっとりとしてサラダにも相性抜群です。



ブリの燻製 盛りつけ図

加工品開発と同時に各方面への売り込み、働きかけも行いました。水産物の見本市であるジャパンインターナショナルシーフードショーでは商品化されたブリの燻製、ブリの生ハム、新たな試作品のブリもつを出展しました。いずれもバイヤーの評価は高く、今後の商品化への期待が一層増えています。



ジャパンインターナショナルシーフードショーの様子

また、養殖ブリを食べる機会を増やしてもらおうとブリ料理のレシピ開発も行いました。プロジェクトチームのメンバーにはフランス料理、割烹料理を得意とする調理師がおり、おしゃれで簡単に作ることが出来るメニューが出来上がりました。

開発したメニューの試食とアンケートは将来、親になり、子供にご飯を作るであろう高校生を対象に実施しました。

実際にブリ料理を試食した高校生からは「美味しい」、「魚臭くない」、「自分でも家でやってみたい」など積極的な意見が聞かれました。

今回開発した料理のレシピを手軽に手に取れるように「養殖ブリを使ったレシピBOOK」を作成しました。大分県のブリ養殖の現状など養殖の背景もわかるようになっています。佐伯市のスーパーの鮮魚コーナー等に置いてありますので、見かけたら手にとつて夕飯の参考にさせていただければと思います。

「ヒジキ資源増殖のための手引き」を作成しました

浅海チーム 主幹研究員 岩野 英樹

アクアニュースNo.42(2016年1月)で作成中と報告しておりました「ヒジキ資源増殖のための手引き」が、この度(2016年5月)完成しましたので、今回は、その内容について紹介させていただきます。

本手引きは、漁業者や水産関係者の方々を対象として、漁業現場でヒジキの増殖や資源保護の実践に役立てていただくために、ヒジキの生態や現場でできるヒジキの増殖、および資源の保護対策や有効利用などについて、大分県が取り組んできた「ヒジキ資源管理手法の開発」、「ヒジキ資源維持増大技術の開発」の中で得られた成果や実際に漁業現場で行った「建材ブロックを用いたヒジキの増殖」に関する事例、既往の知見などを取り纏めて作成しました。

最初に、ヒジキの形態、分布、生長、生活史などの生態について、既往の知見を参考にして取り纏めました。次に、建材ブロックを用いたヒジキの増殖に関して、建材ブロックを入れる時期、その固定方法及び、移植の際の参考知見となるヒジキ幼胚の着生範囲を確認するための試験結果などについて記述しています。さらに実際に漁業現場で行った天然採苗の結果や天然採苗した建材ブロックをヒジキの繁茂していない場所へ移植した後に、卵由来のヒジキの着生が確認された成功事例について紹介しています。また、ヒジキの競合海藻等(ウミトラノオ等)の駆除(磯掃除)については、自作のスクレイパーを用いて漁業者が潜堤を岩盤清掃した結果、翌年にはヒジキの着生が多く見られ、岩盤清掃の有効性が確認された事例を紹介しています。

ヒジキ漁業では、生長して春に収穫するヒジキを「春ヒジキ」、生長前の冬に収穫する若いヒジキを「寒ヒジキ」と呼びます。このヒジキ漁業を安定的、持続的に営むための資源保護と有効利用については、従来から言われている刈り取り時の繊維状根の保護対策に加えて、春ヒジキの刈り取り時にはできるだけ長く切り残し、翌年の卵由来のヒジキ発生量を多くする必要性についてふれるとともに、これまで付着生物等のいわゆる汚れなどの原因で春ヒジキとしては利用できなかったヒジキを、汚れの付く前の冬季の早い時期に収穫し、単価の高い寒ヒジキとして、計画的に有効利用することで漁家収入の増加に繋げることができることについてふれています。

最後には、ヒジキへの主な付着植物や付着動物などの写真を参考例として載せています。今回紹介しました手引きの内容については、今後明らかにすべき課題も残されており、さらにより内容の濃いものに更新していきたいと考えています。雑駁な内容の手引きで恐縮ですが、これから漁業現場でヒジキの増殖や資源管理に取り組もうとされる皆さんのお役に、少しでも立てれば幸いです。

なお、本手引きに関するご意見やお問い合わせ等につきましては、浅海・内水面グループ、もしくは最寄りの振興局水産班までお寄せ下さい。

ヒジキ資源増殖のための手引き



平成 28 年 5 月

大分県農林水産研究指導センター
水産研究部 浅海・内水面グループ

天然アユを増やすための産卵場造成時期とは ～遡上アユの孵化時期の盛期からの推定～

内水面チーム 主幹研究員 畔地 和久

はじめに

アユは川と海とを行き来する魚で、川で孵化後ただちに海へ下り、春先に海で育った稚魚が川に遡上し、成長して産卵する両側回遊型の魚類です。

大分県では、アユの遡上資源を増やすため、産卵場の造成整備等が行われています。その産卵場の造成効果は増水等の影響により3週間程度で消失します。

内水面チームでは、1988年から遡上したアユの孵化時期を調べていますが、2000年頃から孵化時期が遅れる現象がみられています。このような現象に対応するために、産卵場を造成する時期を見直す必要があると考えています。

天然アユを増やすためには、遡上アユの孵化時期の盛期から逆算した産卵時期に合わせて、産卵場を造成する必要があります。

今回は天然アユを増やすために、遡上アユの孵化時期の盛期に合わせた産卵場造成時期の推定結果を紹介します。

調査対象

遡上アユは2016年2月から5月にかけて、調査河川の潮止堰堤付近で26節の投網を使用し、採捕した稚魚です。



図1 調査河川と採取場所(●)の位置

なお、調査河川は、瀬戸内海に注ぐ県北部の山国川と県中部の大分川・大野川、及び豊後水道(佐伯湾)に注ぐ県南部の番匠川です。



写真1 山国川の採取場所(潮止堰堤付近)



写真2 大分川の採取場所(古国府取水堰付近)



写真3 大野川の採取場所(船本床止付近)



写真4 番匠川の採取場所(潮止堰堤付近)

調査方法

遡上アユの孵化時期における盛期を調べるために、調査河川ごとに以下の調査を行いました。

採捕した遡上アユの孵化日を調べるために、頭の中にある耳石に1日に1本できる年輪のような日周輪を計数し、孵化してからの日数(日齢)を調べ、採捕日から逆算して、各個体の孵化日のデータを得ました。

孵化時期の盛期を調べるために、採捕日における投網1回当たりの採捕尾数を参考に、孵化時期の旬ごとに集計し、相対度数のデータを比較しました。

産卵場を造成する時期を推定するために、産卵から孵化までの日数(孵化日数)を調べ、孵化時期から逆算して、産卵時期のデータを得ました。

なお、孵化日数は水温と孵化日数との関係式(孵化日数 $=10^{2.8623}/\text{水温}^{1.4068}$)を用いて、データを得ました。また、水温は調査河川の潮止堰堤付近に水温用データロガーを設置し、データを得ました。

結果

図2に、山国川の遡上アユにおける孵化時期の分布を示しました。山国川の孵化時期の盛期は11月中旬～12月上旬でした。そして、その時期の水温データから推定した産卵時期は10月下旬～11月中旬でした。その結果、山国川の産卵場を造成する時期は10月下旬と推定されました。

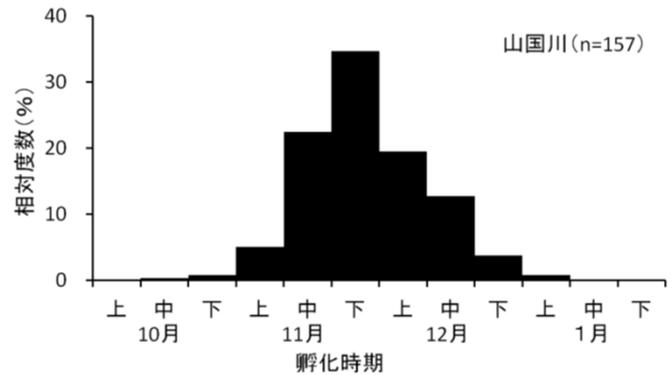


図2 山国川_遡上アユの孵化時期の分布

図3に、大分川の遡上アユにおける孵化時期の分布を示しました。大分川の孵化時期の盛期は11月中旬～12月上旬でした。そして、その時期の水温データから推定した産卵時期は10月下旬～11月中旬でした。その結果、大分川の産卵場を造成する時期は10月下旬と推定されました。

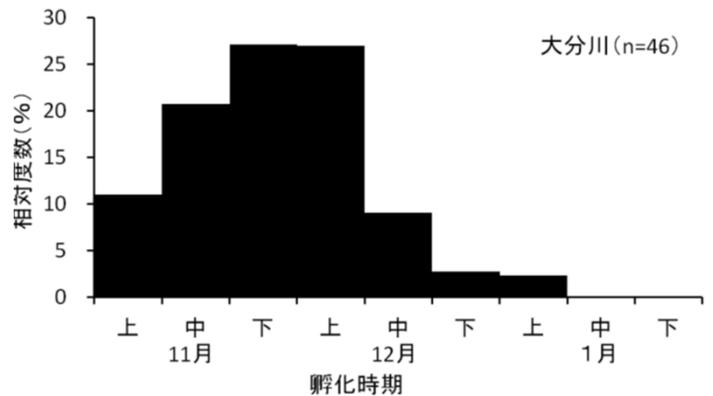


図3 大分川_遡上アユの孵化時期の分布

図4に、大野川の遡上アユにおける孵化時期の分布を示しました。大野川の孵化時期の盛期は11月中旬～12月上旬でした。そして、その時期の水温データから推定した産卵時期は10月下旬～11月中旬でした。その結果、大野川の産卵場を造成する時期は10月下旬と推定されました。

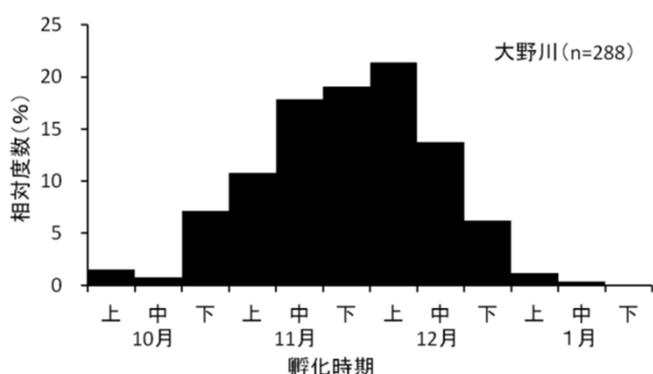


図4 大野川_遡上アユの孵化時期の分布

図5に、番匠川の遡上アユにおける孵化時期の分布を示しました。番匠川の孵化時期の盛期は11月下旬～12月下旬でした。そして、その時期の水温データから推定した産卵時期は11月上旬～12月上旬でした。その結果、番匠川の産卵場を造成する時期は11月上旬と推定されました。

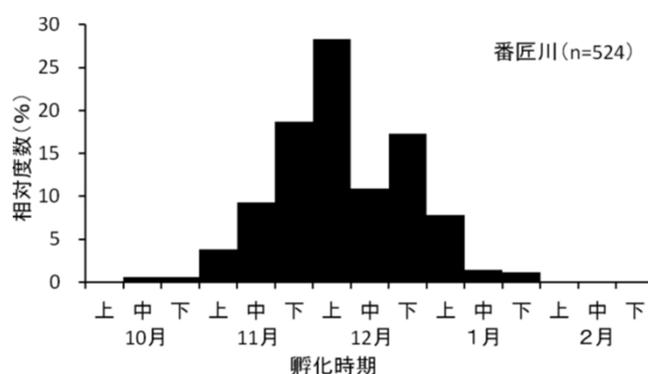


図5 番匠川_遡上アユの孵化時期の分布

以上のことから、今年遡上したアユの孵化時期の盛期に合わせた産卵場造成時期の推定結果は、瀬戸内海に注ぐ調査河川では10月下旬、豊後水道（佐伯湾）に注ぐ県南部の番匠川では11月上旬でした。

これからは天然アユを増やすための取組を提案し、漁業現場での実行を目指したいと考えています。

豊前海で生きる！ ～次世代を担う青年漁業者たちの取組～

北部振興局 農山漁村振興部 崎山 和昭

豊前海では底曳き網や刺網などの漁船漁業が盛んに行われています。しかし、近年豊前海の漁獲量は減少傾向にあり、漁家経営が厳しい状況となっています。そこで、豊前海漁業青年協議会では平成28年2月13日に研修会を開催しました。この研修会では、漁業者一人ひとりが発言できるように従来の講義方式から討論方式に切り替えました。また、アドバイザーとして小野眞一氏(元大分県漁業協同組合専務)を招聘し、「今後の豊前海漁業をどうしていくか？」という議題でグループ討論を試みました(写真1、2)。

このグループ討論の結果、漁業者から多くの発言を引き出すことができました。意見を集約(表参照)すると、豊前海の青年漁業者の多くは流通面の改善に力を入れたいという思いを持っていることがわかりました。その後、同年5月6日の研修会で流通面の改善に向けて今後行いたい研修や活動について再度グループ討論を行い、魚種を絞った県外市場への出荷や豊前海全体での朝市等、様々な意見が出てきました。私たちはこのような意見をもとに、青年漁業者の活動を支援していきたいと思えます。



写真1 アドバイザーによる指導・助言



写真2 漁業者による討論結果の発表

表. 漁業者が考える意見や豊前海漁業の発展に向けて行うべき事項など

項目	意見(現状の問題など)	備考(考えられる対策・すでに実施済み)
①資源管理・保護	<ul style="list-style-type: none"> 獲れる魚でも減っているものとそうでないものがある。 資源の保護が大切。末長く魚が獲れるようにしたい。 ガザミが獲れない。 	クルマエビ、シャコ等の減少、ハモ増加 宇佐では底曳き目合拡大漁具を導入 種苗放流・抱卵ガザミの保護(実施中)
②流通	<ul style="list-style-type: none"> 地元市場への出荷では、仲買人が少ないため、魚を高く買わない。 高齢化で県外市場への運搬が困難な人が増加している。 共同出荷したいが、出荷場や運搬車が必要で経費を考えると困難。 共同出荷するには、魚を管理する人が必須。 漁業者が少ないだけでなく、漁協の職員も少ない。 移動販売で魚を売る。農山間部では魚よりも肉を食べる。 販売所では土日は期待できる。高齢者の家に孫や子が帰るため。 ハモでの取組を行いたい。 	現状: 需要量より供給量が多い。出荷調整が必要。 地元市場への集中。 ハモの共同出荷等
③加工	<ul style="list-style-type: none"> 食文化の変化が起こっているのでは? ハモの骨切り機の推進、安い魚を高く売る等による付加価値の向上 	
④後継者対策	<ul style="list-style-type: none"> 生活が安定していないため、そもそも嫁さんが来ない 青年部員の掘り起こし 	H28年度より増加(宇佐)
⑤その他	<ul style="list-style-type: none"> 地元消費拡大に向けて魚の日をつくる(ベタの日、スズキの日など) 	

潜水漁業者による地元水産物の販売 ～豊後水道河津桜まつり～

中部振興局 農山漁村振興部 吉岡 宗佑

【四浦の河津桜】

津久見市四浦地区には、四浦半島を取り巻くように河津桜が約4000本植栽されています。毎年2月上旬には開花の便りが届きはじめ、ひと月程度楽しむことができます。地元の「四浦を考える会」が中心となった植栽活動は今年で10周年を迎え、今では県内最大の河津桜の名所となり、県内外から多くの観光客が訪れています。

【豊後水道河津桜まつり】

この河津桜の開花期間中、「第4回豊後水道河津桜まつり」が開催されました。2月21日(日)には、イルカ島の特設ステージで伝統の扇子踊りも披露されました。出店では、地元の水産物を使ったまぐろカツやさざえ弁当など津久見の味を多くの観光客の方が楽しまれていました。

【潜水漁業者による水産物販売】

四浦地区の地元潜水漁業者は、この桜まつりで4年前からサザエやワカメなどのお土産用水産物の販売を行ってきましたが、観光客からの要望により、今年はその場で食べられる海鮮広場を開店することになりました。休校となった小学校を会場とし、2月14日～28日まで、サザエやアワビなどの海鮮焼き、手作りのウニごはんやサザエめしなどを提供しました。期間中にはたくさんの方々に津久見の水産物を味わってもらい、たいへん好評をいただくことができました。

【6次産業化を目指して】

今回ご紹介した潜水漁業者の方々は、磯根資源の減少に伴い、ただ漁獲してそれらを市場に出すだけではなく、所得向上のためのさらなる取り組みを模索しはじめています。今後は漁獲物の加工品開発にも注力し、販売品目を増やすことも視野にしています。いわゆる“地方”である地域の漁業者によるこのような地域と連携した活動が、地域の活性化につながり、多くの人を“地方”へ呼び寄せられると感じています。今後も漁業者が行う自主的な取り組みに対して積極的に支援していきます。



写真1 小学校グラウンドでの「海鮮広場」



写真2 大好評だった海鮮焼き

いのちの誕生をみんなで応援



妊娠・出産に伴って肉体的・精神的な嫌がらせを受けるマタニティ・ハラスメントが問題になっています。妊娠していることが配慮されずに過重な仕事をさせられたり、「休めていいな」などと嫌みを言われたり、出産後は復職するつもりだったのに退職を迫られたり。

その一方で、社内に託児所を設ける、子連れ出勤を認める、復職後も短時間勤務や同じ業務に取り組めるようにするなど、女性が安心して子どもを産み、気持ちよく復職できるよう、いろんな配慮をしている企業もあります。

また、お母さんと赤ちゃんにやさしい社会を目指して作られた『マタニティ・マーク』ですが、つけていても座席を譲ってもらえないばかりか、いやみを言われる、押される、といった被害を受けることがあるそうです。このため、あえてこのマークをつけない女性も多いと聞きます。妊娠していることを理由にいじめられる、嫌がらせを受ける。なんて悲しいことでしょう。

小さな小さな命が、この世界で大きく育つよう、みんなで応援する、そんな社会を作りましょう。

* 詳しくは大分県ホームページ [こころちゃんのへや](http://www.pref.oita.jp/site/kokoro/)(<http://www.pref.oita.jp/site/kokoro/>)から
ごらんください

○問い合わせ先 大分県生活環境部 人権・同和対策課 啓発班

〒870-8501 大分市大手町3丁目1-1 TEL 097-506-3177 FAX 097-506-1751

転入者紹介 ～よろしくお願ひします！～

《水産研究部》

【主幹研究員 真田康広】（水産振興課から転入）

この度の異動で、水産振興課から企画指導担当に配属になりました真田です。水産研究部は平成22年度以来5年ぶり、水産試験場の時分を含めて3度目（14年目）の勤務となります。業務は研究の評価や成果のとりまとめ、外部との連絡調整、広報などを担当します。現場のニーズを迅速につかみ、これまでの経験を活かして大分県の水産業の発展につながる研究の支援に取り組んで参りますので、どうぞよろしくお願ひします。

【主幹研究員 堤憲太郎】（漁業管理課から転入）

このたびの異動で、漁業管理課から企画指導担当にまいりました堤です。約20年ぶりの研究機関です。若い頃はやんちゃだったので、みなさんには大変ご迷惑をおかけしましたが、今ではずいぶんおとなしくなりました。20年のブランクを埋めるべく精進して参りますので、水産研究部に対する要望等がありましたら、遠慮なく申し出してください。

どうぞよろしくお願ひします。

【主幹研究員 徳丸泰久】（内水面チームから転入）

3年ぶりに水産研究部に戻ってまいりました、栽培資源チームの徳丸です。安心院への通勤は35分だったが、今は高速使って1時間30分
ドジョウ・スッポンの飼育に気を使ったが、今は車の運転に気をつかう
年を重ね、髪は薄くなりメダボ体型
机の位置は変わったが、背中に陽があたり暑い
仕事の早い研究員ばかりだが、私は内向きな仕事ばかり
そうだ！【資源を増やそう】
資源を増加させる施策。その施策に反映できる研究に取り組もう
『誰にも言わないでくださいね』私が赴任すると、その地域で魚が湧きます。
国東の時はタチウオが豊漁でした。臼杵の時もタチウオが。日出の時はアメタが豊漁。
浅海ではガザミがよく獲れました。
【そうだ、資源を増やそう】資源が増える研究に取り組みますので、よろしくお願ひいたしますー！

【研究員 山本桂伊】（新規採用）

本年度より新規採用で栽培資源チームに配属になりました山本桂伊（カイ）と申します。出身は熊本県八代市で、今回の地震では実家は問題ありませんでした。大学では、雄ウナギの初期成熟に関する研究を行っていました。

私の担当は【ヒラマサの種苗生産】です。これから大分県の新しい顔となるヒラマサの人工種苗の供給拡大を目指して技術開発に取り組んでまいります。初めての業務でご迷惑をおかけすることが多々あるかと思いますが、皆様のお役に立てるよう一生懸命頑張りますので、どうぞよろしくお願ひ致します。

【研究員 甲斐桑梓】（新規採用）

本年度新規採用職員の甲斐桑梓（ソウシ）と申します。私は、養殖環境チームで水産動物の疾病診断などを担当することになりました。魚病学は初めて挑戦する分野ですので、一から勉強することばかりですが、少しでも早く一人前と認めていただけるよう努力してまいります。どうぞよろしくお願ひいたします。

【機関長 高木幹也】（漁業取締船はつかぜから転入）

このたびの異動で農林水産部漁業管理課から水産研究部調査船豊洋機関長でまいりました高木と申します。水産研究部は初めての勤務で、昨年までの20年間携わった漁業秩序を維持するため取締り業務とは全く異なり、漁業振興の分野になると思いますので、漁業発展のため少しでも役に立つ海洋調査を行ってまいりたいと思います。まだまだ不慣れで戸惑うことも多々ありますが、船長をはじめ他の乗組員と力を合わせ、安全航海と実のある調査を行っていきたく思います。どうぞ宜しくお願ひします。

《浅海・内水面グループ》

【主幹研究員 伊藤龍星】（水産研究部から浅海チームへ）

このたびの異動で、上浦の水産研究部から浅海チームへ配属されました伊藤と申します。5年前までは浅海に居ましたが、その後、県庁～水産研究部（上浦）を経て再び戻って来ました。担当業務は資源関係や世界農業遺産関連調査の他、他機関との連絡調整や全体的な窓口も受け持っています。お問い合わせなどありましたら、お気軽に伊藤までお願いします。

【研究員 菅沼倫美】（水産振興課から転入）

このたびの異動で、水産振興課から浅海チームに配属となりました菅沼と申します。ヒジキの養殖技術等、主に海藻の研究を担当します。これまでとは全く異なる業務内容にまだまだとまどうことも多くありますが、海藻の魅力を一杯ひきだして、漁業者の方の力になる成果を出せるよう努力してまいります。どうぞよろしくお願い致します。

【研究員 宇都宮のぞみ】（新規採用）

今年度より、新規採用で浅海チームに配属となりました宇都宮のぞみと申します。ナマコの種苗生産を担当しております。毎日、ナマコの成長を親のような気持ちでみています。まだまだ未熟な点も多くありますが、ナマコの種苗生産技術の開発に貢献し、一日も早く研究員として皆様のお役に立てるよう頑張りますので、どうぞよろしくお願い致します。

【主任研究員 徳光俊二】（浅海チームから内水面チームへ）

内水面チームに帰りました徳光です。担当は、ヤマメ、アマゴ、ニジマス、スッポン、ドジョウ、ウナギの養殖指導とウナギの天然資源調査が主な仕事になります。職員数が減少し、仕事は多岐にわたりますが、安定した養殖業を行っていくためにコスト低減や付加価値の向上を考えていきたいと思っております。漁家巡回に回るときなどに、問題点、御意見などを寄せていただけると幸いです。よろしく申し上げます。

編 集

大分県農林水産研究指導センター水産研究部

発行者・連絡先

大分県農林水産研究指導センター水産研究部

ホームページアドレス <http://www.pref.oita.jp/soshiki/15090/>

水産研究部
管理担当、企画指導担当
栽培資源チーム、養殖環境チーム

佐伯市上浦大字津井浦194-6 (〒879-2602)
Tel 0972-32-2155 Fax 0972-32-2156
E-mail a15090@pref.oita.lg.jp

水産研究部 浅海・内水面グループ
管理担当、浅海チーム

豊後高田市呉崎3386 (〒879-0608)
Tel 0978-22-2405 Fax 0978-24-3061
E-mail a15091@pref.oita.lg.jp

水産研究部 浅海・内水面グループ
内水面チーム

宇佐市安心院町荘42 (〒872-0504)
Tel 0978-44-0329 Fax 0978-34-4050
E-mail a15091@pref.oita.lg.jp